

現代中国におけるキリスト教の状況に関する一考察

(一) 寧波、上海地区を例として

安部 力

はじめに

本報告は、現代の中国大陸（中華人民共和国。以下、中国とする）におけるキリスト教、特にカトリック・キリスト教（「天主教」と呼ばれる）の状況、及びカトリック信者が持つ「宗教意識」を探ることを目的とする。

筆者はこれまで、台湾のカトリック・キリスト教信者についていくつか報告を行ってきたが(1)、本報告はその姉妹篇にあたる。それは筆者の研究対象が「東アジア」におけるカトリック・キリスト教の現代的状況や歴史的意味の探求にあり、中国、台湾、韓国（朝鮮半島）、日本を例として取り上げ、それぞれを比較対照しながら、各地域の特殊性や相互の共通性を考察することを目的としているからである。

また、その中でも、上海及び寧波を例にとった理由は、以下の通りである。

まず上海については、中国のカトリック・キリスト教に言及する場合において、その影響力が最も大きかったとされる徐光啓の出身地だからである(2)。その墓所は現在、「光啓公園」として整備され、敷地内には徐光啓記念館も併設されている。また、この墓所がある地区一帯は「徐家滙」（行政上は「上海市徐滙区」と呼ばれ、中国でも最大級の天主堂である「徐家滙天主教堂（徐家滙主教座堂、聖依納爵 (S. Ignatius) 天主堂、無原罪始胎堂とも言う）」があり、ここは今でも多くのカトリック信者が集う場所となっている。その徐家滙天主教堂にはイエズス会総院や蔵書楼、徐滙公学 (College) が併設されており、徐家滙が現代中国のカトリック・キリスト教において、屈指の役割を果たしていることが分かる。このように、中国におけるカトリック・キリスト教の中心地の一つと言える徐家滙を抱えているためか、上海市には多くの天主堂が存在しており、所在地が確認できるものだけでも100個所を越えている(3)。

現在、中国では、カトリック・キリスト教及びプロテスタント（「基督教」「耶

蘇教」と呼ばれる）が、その信者数を増加させているとされる(4)。そのような現代中国の状況を考える際に、前述の理由から、上海を指標として取り上げることには問題はなからうと考える。

次に、寧波を取り上げる理由であるが、これは何よりもまず、寧波を訪れる機会が増えた事による。詳細は省くが(5)、筆者は本来、ある地域の特性を考察する場合に必ず何らかの比較対照となる対象を設定する事としている。そのため、上海の状況をより客観的に観察することを可能にする地域を模索していたが、その条件として「外来文化との接触が多い沿岸地域」を念頭に置いていた。それは日本の長崎や鹿児島のように、やはり「海港」であることが「外来文化」との接触には大きな条件の一つとなるからである。福建省（泉州）や澳門（マカオ）も候補であったが、図らずも前述の条件を持ち合わせ、日本とも関わりの深い寧波を訪れて、現地での調査を可能にする機会を与えられたことにより、本報告で取り扱うこととしたのである。

寧波について簡単に説明しておく、古くから「明州」として有名な海港であり、外国文化との接点という点でも、上海より長い歴史を有している。また、日本との繋がりがから言っても、江戸時代（中国では明朝末期から清朝）に日本に來航した船の多くが寧波から出帆しており、寧波が文化の窓口として大きな役割を果たしていたと言える。つまり、その地理的役割から考えると、カトリック・キリスト教（特にイエズス会士）が東アジアに到來した16世紀末にはすでに確固とした地位を確立していたのであるから、キリスト教に関する痕跡が上海のように何か残っていても不思議はないはずであるが、しかしその点については従来、ほとんど言及されてこなかったようである(6)。

以上のような状況を考えると、同じく「海港（貿易港）」であり、「外来文化との接触地」という視点から見た場合に、キリスト教に関する寧波と上海の状況は好対照をなしていると言えよう。上海という地域の特性や状況をより把握しやすくするため、また、寧波という地域におけるキリスト教の状況をより明らかにする端緒とするため、本報告ではこの2つの地域を取り上げることとする。

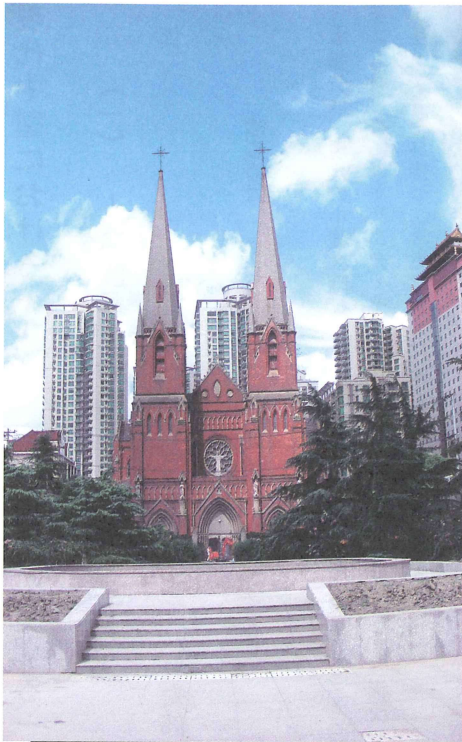
一、上海におけるカトリック・キリスト教について

筆者が本報告に関する上海での現地調査を行ったのは、2007年、2008

年、2009年(すべて8月)の3回である。但し、前述の通り、上海におけるカトリック・キリスト教の教会だけでも100個以上にのぼるため、網羅的な調査はまだ途上である。そのため、今回は現代の中国におけるキリスト教の状況を特徴的に示す一端を紹介し、今後の継続調査の足がかりとしたい。

今回、上海での調査で対象としたのは、前に紹介した徐家滙天主教堂(上海市徐滙区蒲西路158号)であるが、今回は紙幅の都合もあり、それ以外に聖方濟各沙勿略聖堂(St. Francis Xaviers Church 上海市黄浦区董家路185号)、和平之后聖母堂(The Church of Our Lady of Peace 上海市楊浦惠民路692号)、を取り上げることとする。この三個所を取り上げる理由としては、徐家滙天主教堂は前述の通り、上海を代表する天主堂であり、ミサに参加する信者数、訪問する市民や観光客などで、最も多くの人に目に触れる教会だからである。二箇所目の聖方濟各沙勿略(聖フランシスコ・ザビエル)聖堂は、上海にある天主堂としてはそれほど目立つ天主堂ではないが、日本人にはなじみの深い、またカトリック・キリスト教の中国布教において主要な役割を果たしたイエズス会で最初に東方伝道を開始した聖フランシスコ・ザビエルの名を冠した聖堂だからである。三個所目の和平之后聖母堂は、街中にひっそりと建つ天主堂であり、信者の生活に近い一般的な天主堂であると考えられるからである。以下、現地調査で得た写真を紹介しながら、調査時の所感や説明などを加えていくこととする(7)。

まず、徐家滙天主教堂であるが(写真1)、街中にそびえ立つ偉容を誇っている。



徐家滙天主堂 (2007年8月撮影)

この徐家滙天主教堂に2007年に訪れた際、周囲は工事中であったが、内部を見学することは出来た(写真撮影は禁止)。内部の見学者は50人ほどであったが、そのほとんどが外国(恐らくヨーロッパ)の方であった。2008年に訪れた際には、丁度ミサが行われており、参加者の多くは中国人で、地元の方々の方々であった。この天主堂は2500人を収容できる広さがあるが、そのほとんどの席が埋まっていた。また上海という土地柄もあってか、外国の方の姿も見え、少なくとも50人程度は確認できた。外国の方の中には家族連れの方もいたことを考えると、旅行中にミサのために立ち寄ったか、もしくは家族で上海に出張(移住)の方が、常々この天主堂でのミサに参加しているものと考えられる。この点については後述することになるが、このような「外国の方」がこの中国の徐家滙天主教堂で行われるミサに参加している、ということから何が考えられ、言えるのか。これは「現代中国におけるキリスト教」を考える良い材料になるという指摘に留めておく。(その一端については注9を参照)

次に聖方濟各・沙勿略聖堂である(写真2)が、訪れた時間が遅かったため、内部を参観することはできなかった。『今日天主教上海教区』には、「この天主堂は1847年定礎、1853年に開設された。ローマ宮殿方式で建てられ、一時期は江南教区の主教座聖堂でもあった。文化大革命期には転用されたが、1985年に元の役割に戻された。2005年の5月から改修を受け、元の状態を完全に回復した。」とある。この天主堂も日常的に使用されている模様であった。



聖方濟各沙勿略聖堂(2008年8月撮影)



(写真4) 和平之后聖母堂
(2008年8月撮影)

三番目は、「和平之后(きさき) 聖母堂」(写真4)である。この教堂は写真を



(写真3) 聖方濟各沙勿略聖
堂敷地内の聖母子像

また、この聖方濟各・沙勿略聖堂の敷地内には「聖母子像」が安置されていた(写真3)。筆者は以前、台湾における「聖母子像」について考察したことがある(注1の拙稿を参照)、中国に於いても「聖母子像」を一つのキーワードにしたと考えている。今回、ここで紹介する聖方濟各・沙勿略聖堂の聖母子像は、ヨーロッパで見られるような聖母子像であり、「中国風」のアレンジは見られない。これは現代中国に於いて、「純粋な欧米文化」として「キリスト教」を受容する姿勢の現れであろうと推測している。無論、「教義」的には中国キリスト教会は「社会主義」と「キリスト教」との摺り合わせに腐心している(8)が、一般の信者に対しては恐らく「欧米ブランド」としてのキリスト教を強く打ち出して広めようとしているのではないだろうか。この点に関しては、台湾におけるカトリック・キリスト教とは趣を異にしている印象を受けた(9)。

見ても分かるように、非常に簡素な教堂である。中でミサは行われておらず、扉が開いていたため、話を伺おうと中に入って見たところ、管理人らしき方が出てきて、話しかけるまでもなく追い出されてしまった。いきなり不躰であった私に非があつたのであるが、私を見るなり「部外者」と分かつたのは、この教会に来る信者の顔を管理人の方が覚えていて、その中に私が入っていないためである。つまり、この教堂が抱える信者数が暗記できるほどしか存在していない証左なのではないだろうか。その点を考えると、この教堂が地元の住民の生活に密着した教堂であるとも言えるのではないだろうか(無論、私が「怪しさ」を醸し出していたのかも知れないが)(10)。

上海市楊浦区人民政府によれば、「この天主堂は1928年にフランス人神父によつて建設された。当時の信者数は739人で、1935年には1638人になつた。その多くは労働者とその家族であつた。当初のこの教堂の外観はカトリック様式であり、内部はローマ式であつた。始め、フランス人イエズス会士によつて管理され、1936年からスペイン人イエズス会士の手に移った。天主教安慶教区事務局はこの教堂に事務所を併設し、聖心小学校や和平診療所も管轄していた。新中国建国後は正常に宗教活動を行っていたが、文化大革命の時期は活動を停止させられていた。その後改修再建が始まり、1990年11月25日に再建記念のミサが行われた」とのことである。このような天主堂が上海市内には多くあるようであり、今後、それらを調査することで、現代中国におけるキリスト教の状況の一端をつかみたいと考えている。

以上、簡単ではあるが、上海の天主堂を三個所紹介した。本来ならば、信者の方に話を伺つた上で報告を行わなくてはならないのだが、上海ではそのような雰囲気を感じられなかった。無論、私自身に何らかの問題があるのであるが、何より、ことカトリック・キリスト教に関しては「部外者」の存在に敏感であるような印象を受けた(この点に関する私見は注の8、9を参照されたい)。中国に於いて「宗教」(宗教意識)を研究対象とすることは、まだかなりの困難があると今回の現地調査では感じた。今後はアプローチの方法等も含めて、再検討しなければならぬだろう。台湾で行つた調査のような開放的な雰囲気は上海では感じられなかったことが、現代の中国におけるキリスト教の状況を示していると言えるのかも知れない。

最後に、本論では寧波地域におけるカトリック・キリスト教の状況についても

述べる予定であったが、紙幅の都合もあり稿を改めることとしたい。但し前述のように、参考までに寧波におけるキリスト教について通史的に整理している論文を訳出している。今後、寧波について言及する際の、理解の一助とすることで、本稿の責を埋めたい。

(注及び参考文献)

(1) 拙稿「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察」

(一) 「祖先祭祀をめぐる問題」(『北九州工業高等専門学校研究報告』

第41号、平成20年1月)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教

意識に関する一考察」(二) 「天后聖母」について」(『北九州工業高等

専門学校研究報告』第42号、平成21年1月)。

(2) 徐光啓及び現在の徐家滙については以下の研究が参考になる。

徐光啓関連で、中文のものとしては、『徐光啓逝世三百五十年』(上海市天

主教愛国会・上海市天主教務委員会編、1983年)、『徐光啓研究論文集』

(席澤宗・呉徳鐸主編、学林出版社、1986年)、『徐光啓評伝』(陳衛平・

李春勇著、中国思想家評伝叢書138、南京大学出版社、2006年)、『中

西文化会通第一人 徐光啓學術検討会論文集』(宋浩杰主編、上海古籍出版社、

2006年)などが主に挙げられ、日本文のものとしては、後藤基巳「徐光

啓」『保祿徐公評伝』(一)・(二)、『明清思想とキリスト教』研文出版、19

79年)、中村高志「徐光啓の天主教観に関する一考察」(『中国哲学』第十

一号、北海道中国哲学学会、1982年)、葛谷登「徐光啓の天主教入教につ

て」(『キリスト教史学』39号、キリスト教史学会、1985年)、岡本さ

え「徐光啓と夷狄・中国の比較思想」(『異文化を生きた人々』中央公論社、

1993年)、拙著「徐光啓の天主教理解について」(『中国哲学論集』第二

十五号、九州大学中国哲学研究会、1999年)などが挙げられる。また、

徐家滙関連では、『今日天主教上海教区』(天主教上海教区光啓社出版、20

00年)、『歴史的徐家滙』(宋浩杰責任主編、上海文化出版社、2005年)、

『留存的歴史・上海徐滙文物保護単位』(黄慧鳴・建敏責任編集、上海文化出

版社、2008年)、『徐滙区文物志』(上海市徐滙区文物志編集委員会編、上

海辞書出版社、2009年)などが有益である。

(3) 中国天主教HP (www.catholic.org) によると、住所が確認できる上海市内

のカトリック・キリスト教の教会(天主堂)は114箇所である。

(4) 様々な数字が報告されているが、公式(政府下の中国カトリック愛国委員会及び中国基督教三自愛国運動委員会の集計による)には「プロテスタント信者2100万人、カトリック信者600万人に過ぎない」とされている。しかし、香港「サウスチャイナ・モーニング・ポスト」(2009年4月12日)は、「最近、何回かの調査結果により、実際の数字を推定して見た結果、カトリックとプロテスタント信者を合わせた多様なクリスチャンが1億2500万人を越え、これは中国全体の13億の人口の内、10人中1人にあたる」と伝えている。「多様な」とは所謂「(中国政府)非公認」の教会であり、その形態は様々である。

(5) 筆者は科学研究費補助金特定領域テーマ「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成・寧波を焦点とする学際的創生」(現地調査研究部門 寧波學術班「寧波における知の営みとその伝統・学脈・宗族・トポフィア」代表早坂俊廣(廣州大学人文学部准教授)の現地調査メンバーの一員として寧波を訪れる機会を与えられ、その過程で寧波におけるキリスト教に関する資料を入手することが出来た。このような状況から、寧波を上海との比較対象に設定することが可能になった。

(6) 従来中国におけるキリスト教(特にカトリック)研究でこの「寧波」地域に言及しているものとしては日本では、岡本さえ氏の『近世中国の比較思想—異文化との邂逅』(東京大学出版会、2000年)が、管見の及ぶ限りでは、ほとんど唯一のものであると思われる。中国での研究においても、「寧波地域におけるキリスト教」が扱われた例は寡聞にして知らない。いくつか概略的に触れた例はある(例えば、費頼之著、馮承鈞訳『在華耶穌會士列伝及書目』中華書局、1995年の「費楽徳」や「孟儒望」の項)が、寧波地域に関する通史的視点を持った研究等はなかった。そのため、今回の現地調査で得た知見をもとに、寧波地域のカトリック・キリスト教についてまとめていく研究(徐良雄・汪嵐著「明清間来寧波天主教傳教士考略」(『寧波与海上絲綢之路』科学出版社、2006年)所収)を、参考資料として訳出することとした。これ以外で、寧波におけるキリスト教を扱ったものとしては、王慕民「西方教会与寧波外来文化」(『寧波历史文化二十六講』(許勤彪主編、寧波出版社、2005年)が大変参考になる。

(7)本稿で紹介する写真は、筆者が現地調査時に撮影したものであり、撮影許可がないものについては掲載していない。各天主堂の内部写真については、注(2)で紹介した各書、徐家滙天主堂については『歴史的徐家滙』や『留存的歴史・上海徐滙文物保護単位』が、聖方濟各・沙勿略聖堂及び和平之后聖母堂については『今日天主教上海教区』が参考になる。

(8)例えば、中国政府の管轄下にある中国天主教愛国会及び中国天主教主教団が発行している定期刊行雑誌『中国天主教』を見れば、現在の「中国天主教会」がどのような方針で動いているのかが看取できる。例を挙げれば、「天主教愛国会工作条例」の「第一章 第2条」には、「中国天主教愛国会の基本理念は以下の通りである。中国共産党の指導を遵守し、愛国と愛教の旗幟を鮮明に掲げ、全国の神父及び信者を団結させて法律の尊厳を守り、人民の利益を重んじる。また、民族の団結と国家の統一を維持し、「自主自辦」の原則を固守してゆるがせにせず、宗教管理事務局と共同で教会事務を管理し、民主的な宗教活動を行い、天主教の社会主義社会への適応を促進する。(傍点筆者) ために努力するものである。」(2003年第5号、総期107号、21頁)とある。この他、中国共産党の示す「三個代表重要思想」(中国共産党は「中国の生産的な社会生産力の発展の要求」「中国の先進的文化の前進の方向」「中国の最も広範な人民の根本的利益」の三つを代表する)について、「この(三個代表)思想を指針として、天主教界が最も重んじるべきキーワードは「社会主義社会との適応を堅持すること」である。」という論文(『中国天主教』2003年第6号)や「中国天主教と社会主義社会とが適応することの現実的な意義について」(同前、2004年第2号)、「宗教は自発的に社会主義社会との適応に働きかけるべきである」(同前、2004年第5号)など、この様な論調は他にも多く見られる。

(9)この点に関して、中国と台湾とでも最も異なるのはカトリック・キリスト教の総本山である「ローマ法王庁」との関係に於いてであろう。中国のキリスト教会の基本方針は「自治、自養、自伝(自立、自主、自辦とも言われる)」であり、キリスト教における司教などの教会職への任命(叙任)を中国政府独自で行っている。本来、カトリック・キリスト教における叙任権はローマ法王庁(バチカン)が有し、ローマ法王庁の認可が必要である。しかし、中国政府はこの「叙任」を「内政干渉」にあたるとしてローマ法王庁の関与を認

めていない。これに対しローマ法王庁も中国政府独自の叙任を認めておらず、現在も両者は妥協点を見いだせていない。これに対して台湾には、ローマ法王庁が認定した教会職者が存在しているため、ローマ法王庁との関係は良好であると考えられる。この点については本来、より深く考察しなければならぬテーマであるので、いささか冗長にはなるがここで言及しておきたい。

中国(政府及び天主教会)のローマ法王庁に対する姿勢は、まず政府の宗教に関する方針を示した「宗教事務条例」(中華人民共和国 國務院令 第426号、2004年11月30日)によつて窺うことが出来る。例えば、「第三条 政府は法にのつとつて正常な宗教活動を保護し、宗教団体及び宗教活動を行う場所や宗教を信仰する国民の合法的な権利を保証する。宗教団体や宗教活動を行う場所及び宗教を信仰する国民はすべからず国家の定めた憲法、法律、法規、及び規定を遵守しなければならない。国家の統一や民族の団結及び社会秩序の安定を維持しなければならない。どのような組織及び個人であつても、宗教を利用して社会秩序を破壊したり、個人の身体や健康に害を及ぼしたり、国家の教育制度を妨害することは出来ない。その他、国家利益や社会公益及び国民の合法的な活動を損なうこともできない。」とあり、まず何より「国家の定める社会秩序」が優先されることが分かる。それに続けて「第四条 各宗教は独立、自主、自辦の原則を堅持し、宗教団体や宗教活動を行う場所及び宗教を管理する事務に於いて外国の勢力の干渉を受けない。」としている(『中国宗教』国家宗教事務局主管、中国宗教雑誌社編集出版、2004年12月号)。この第四条によつて、ローマ法王庁の「叙任権」が排除されているのである。このような政府の姿勢を受けて、例えば、李肇星外交部長(2006年当時)は、第十回全国人民代表大会第四次會議の記者会見で、香港アジアテレビ局の記者が発した「最近バチカン(ローマ法王庁)が香港の陳日君氏を枢機卿に任命しましたが、このことを中央政府はどのように評価しますか。このことは中国政府とバチカンとの関係に何か影響をおよぼしますか。」という質問に対して、「香港は中国の香港、つまり香港の同胞には中国人民が含まれている。香港に関して我々は、中国政府の憲法と香港特別行政区の基本法に基づいて対応する。我々は香港行政特区政府の指導の下に、香港の同胞が各方面で得た成功を喜びに感じている。バチカンに関しては、どのような形式であれ中国国内の事務に関与しないことを

望んでおり、また中国国内の「地方及び一つの省」【台湾を指す】と所謂「外交関係」を保持しないことを望んでいる」と答えている(『中国天主教』2006年第2号)。これは、中国政府の宗教政策に於いてローマ法王庁との関係が、台湾をも巻き込んだ政治的課題になっていることを浮き彫りにしている。そしてこのような政府の姿勢は当然、政府管轄下の中国天主教会にも引き継がれており、「新中国成立後、ローマ法王庁には『天主は愛である』という慈しみの心で国民を感化する姿勢が無かったばかりか、内政干渉まで行って中国の主権を無視し、教皇令や通達を度々発令して中国国内の実情に暗い一部の反動勢力をそそのかして共産党に反対させたり、人民政府の政策による法令を妨害させたりした」(崔義辰「迷羊識途、走中国特色的基督福伝之路」『中国天主教』2007年第1号、9頁)のような発言を産んでいる。また同時に、このような中国政府や中国天主教会の姿勢によって、結果として注4に示した「多様な」教会及び信者形態も発生している。特にローマ法王庁につながりを持つ中国のカトリック・キリスト教信者の組織は「地下教会」とされて、取り締まりの対象となっている。その実情については『中国低層訪談録』(廖亦武著、劉燕子訳、竹内実日本語版監修、集広舎発行、中国書店発売、2008年)の「地下カトリック教徒」の項を読むと、その一端が理解できる。この「地下教会」についてはあまり中国国内で公にされることはないようであるが、香港で出版された『籠中の鳥児 中国宗教信仰自由実況資料彙編』(香港天主教正義和平委員会、2003年)には、「地下教会」の発生原因、現況、そしてここ十年ほどの間に中国本土で逮捕されるなどして、取り締まりの対象となった神父などについて詳しく述べられていて、この問題が抱える根深さが理解できる。中国政府とローマ法王庁との関係が今後どのような状況を迎えるのか予断を許さないが、中国政府は「バチカン」以外の「キリスト教組織」(特にプロテスタント諸派)とは盛んに交流を続けており、その信者数の増加や中国の国際社会における影響力の増加と相俟って、キリスト教を取り巻く状況に一段と存在感を増して来ているであろう。この中国政府の動向はカトリックとプロテスタントが進めている「エキシメニズム(教会一致促進運動)」においても課題の一つになって来るとであろうし、結果として中国政府とローマ法王庁とが妥協点を見いだしたとしても、その時点で「地下教会」に関係する者の処遇がどうなるのか等、

さまざま火種を宿していると考ええる。最後に付言すれば、台湾には「徐滙中學」があり(台北県蘆州市中山一路1号)、2008年3月に訪問して盛常在氏(図書館長)に「上海の徐滙中学との関係」についてお話を伺ったことがある。この時は「深い関係を持っていますし、今後も交流を続けていくつもりです」と大変フランクにお話し頂いた。突然訪問したにも関わらず、大変温かくもてなして頂いたことを記憶している。このような草の根交流も、今後少なからず影響を受けざるを得ないことが危惧される(この台湾徐滙中學については、前掲の『歴史的徐家滙』82頁にも言及がある)。

(10) この「和平之后聖母堂」は内部の参観が叶わなかったため、ここでは紹介できなかったが、既出の『今日天主教上海教区』や、上海楊浦区人民政府のHP「<http://www.shyp.gov.cn/html/website/hepingzhhoutang/list/>」に内部の写真が紹介されているので参照されたい。

《参考資料》

注(6)で紹介したように、参考資料として以下の論文を訳出する。この論文は寧波におけるカトリック・キリスト教の宣教師の活動について通史的に整理している。管見の及ぶ限りでは、このような研究は従来無く、また中国キリスト教史を考える上でも、寧波の位置づけを理解できる研究として価値を持っていると考え、ここに訳出することとした。

(原著)「明清間來寧波天主教傳教士考略」(徐良雄：天一閣博物館、汪嵐：寧波市図書館)(『寧波与海上絲綢之路』寧波文物考古研究叢書 丁種第一号、寧波『寧波与海上絲綢之路』申報世界文化遺產弁公室、寧波市文物保護管理所、寧波市文物考古研究所編著、北京科学出版社、2006年、321頁～328頁) 所収

・本文の「天主教」は、文中の「新教」と区別するためそれぞれ「カトリック・キリスト教」、「プロテスタント」と訳出した。

・訳文中の() は原注及び原文にある() を示し、訳者による注などは【】で示してある。

(論訳)

「明朝清朝期における寧波でのカトリック・キリスト教宣教師についての考察」(徐良雄：天一閣博物館、汪嵐：寧波市図書館)

本論文では、カトリック・キリスト教が中国に伝来してからの歴史と、明朝清朝時代にカトリック・キリスト教のイエズス会が中国において行った布教活動の基本戦略について簡単に述べ、且つ様々な文献の中から明朝清朝時代に寧波地域で布教活動をした外国人宣教師の業績を集め整理し、併せて彼らの寧波地域での活動が寧波地方の文化に対して与えた影響についても、概述していく。

カトリック・キリスト教は、キリスト教の三大教派(カトリック・キリスト教、東方正教、プロテスタント)の一つであり、中世においては三度中国に伝来し、その最も早い伝来は唐代にまでさかのぼる事ができる。西暦1625年(明天啓五年)、西安で出土した『大秦景教流行中国碑』に示されている「景教」とは、即ち西暦5世紀にローマ法王庁によって異端とされたネストリウス(Nestorius)が創始したもので、中国に伝入して「景教」と呼ばれるようになったものである。その名称は「公明正大」であることを意味しているが、所謂「唐代に起こった」「曇首年間の法難(廃仏)」に伴い、禁止の目に遭った。ネストリウス派はキリスト教の正統ではないが、現存している景教関連の漢文文献にはキリスト教思想が紹介されている。例えば『序听迷詩所経』、『神論』、『宣元至本経』、『大聖通真帰法先賛』、『志玄安楽経』、『三威蒙度賛』、『尊経』など7種類の文献はすべて敦煌からの出土史料に見える。

13世紀後半にヨーロッパからアジアにまたがる、蒙古帝国によって築かれた元王朝は、ユーラシア大陸の東西を貫いていたため、ローマ法王庁は宣教師を中国まで派遣していた。当時、中国では「天主教」「カトリック・キリスト教」と「痕跡をとどめていた景教とをまとめて」「也理可温教」と呼んでいた。この也理可温教の信者はそのほとんどが蒙古人や中央アジアの人々であったため、中国国内の居住民の間に立脚地が無く、元王朝が倒れると共に、也理可温教も中国国内から姿を消してしまった。

カトリック・キリスト教の三回目の中国への伝来は16世紀の明朝末期である。当時のヨーロッパ世界においては、カトリック・キリスト教の東方世界への進出を促すいくつかの要因があった。まず一つ目に、16世紀にマルティン・ルターによって始められた宗教改革運動は、キリスト教徒の広大な共鳴を呼び起こし、信者らは次々にカトリック・キリスト教会からの離脱を公言して、ルター派やカルヴァン派のような新しい教派を立てたことである。これらの教派を総称して「プロテスタント」と呼んでいる。プロテスタントの発生はヨーロッパの新しい資産

家階級の需要を満足させ、広汎な支持を勝ち取った。また、同時にプロテスタントはローマ教皇及びカトリック教会の権限の制限を主張したため、世俗君主の支持も取り付けた。プロテスタントの勃興は、結果的にカトリック・キリスト教の勢力を弱めることとなったのである。ローマ法王庁は、宗教改革運動がもたらした衝撃に対応するため、ある一つの重要な施策、つまり「ヨーロッパで失ったものを海外で補う」という方針を打ち出したのである。ここにおいて、カトリック・キリスト教の宣教師が明朝から清朝にかけて大挙して中国に渡来するという歴史的事象が発現したのである。

二つ目の理由として、15世紀以降に航海術が急速に発達したことにより、コロンブスやマゼランに代表される航海家の新大陸探検が成功し、地理上の大発見や新航路の開拓が進んだことである。これはヨーロッパに於ける文芸復興「ルネッサンス」期の重要な成功であった。中でもポルトガルの航海家であるバスコ・ダ・ガマが、1496年にアフリカの喜望峰を経由して印度に到達してから以降は、この航路によってヨーロッパから中国近海への到来が可能になった。新航路の開拓は、ヨーロッパと古い東方の、宗教を含めた文化交流を促進し、併せて多くのキリスト教宣教師達の中国への渡来を可能にしたのである。

本論文は、甬地方【寧波地方】において活動した宣教師について述べるものであるが、対象とする期間を明朝の嘉定三十二年(1553年)から清朝の道光二十二年(1842年)までとし、カトリック・キリスト教の宣教師が所謂「西学東漸、中学西伝」の過程で果たした積極的な役割を重点的に扱うこととする。その理由は、1553年にポルトガルが「濡れた船の積荷を乾かしたい」ということを口実にして、澳門【マカオ】を強引に占拠し、マカオを植民地政策の拠点としたからである。カトリック・キリスト教の宣教師はポルトガル商人に随伴してマカオに渡来し、マカオを中国内地におけるカトリック・キリスト教の布教基地、つまりカトリック・キリスト教が中国に浸透するための踏み台・足がかりの地としたのである。また、1840年に勃発したアヘン戦争は、満州人による清朝政府の敗北によって終わりを告げたが、これより以後、度々発生した西洋列強による中国への侵略戦争【アロー戦争など】でも、腐敗堕落した清朝は敗北し、中国を侵略した列強と一連の不平等条約を締結せざるを得なかった。これらの不平等条約の中には必ず「宣教師の保護及び自由な布教活動の許可」という項目が含まれていた。このような19世紀後半に締結された不平等条約による保護の下、カ

トリック・キリスト教は中国においてそれまでになかった発展の機会を獲得したのである。しかし、このような艦砲によって開かれた布教への道は、カトリック・キリスト教の中国国内への深い進入を可能にはしたが、これによって却って明らかに西洋列強による植民地主義と文化侵略的な色彩を帯びることになってしまったのである。本論文の主旨は、中国文化と西洋文化との交流に於いて、カトリック・キリスト教の宣教師が果たした積極的な役割について述べることにあるため、特に前述のような時期的な区切りを設けたのである。

一、明朝から清朝に中国に伝来したカトリック・キリスト教の布教方針に

ついて

ポルトガルがマカオを占拠して以降、ローマ教皇がカトリック・キリスト教のイエズス会に東方における布教活動の許可を与えたため、宣教師【主にイエズス会】が陸続と中国に渡来した。しかしこの時期の宣教師は中国語を話すことが出来ず、中国の習俗や儀礼についても無知であったため、そのことが彼らの布教活動の障害となっていた。彼らは中国が長い文化的伝統を持った文明の古国であり、高い民族的プライドを持っていることを認め、中国に入ったならば中国の習俗に倣い、中国の伝統文化を尊重し且つ学習し理解することに努力し、中国語に精通して初めて、中国の士大夫や人民と上手く付き合うことが出来ると認識したのである。

宣教師達はまた、中国では道徳哲学は重視されているが、宗教的な信仰については十分重視されておらず、中国にあつて儒学は士大夫が守るべき礼法であるのみならず、中国文化を規定する基本的な特徴であることも認識した。そして、もし中国人にカトリック・キリスト教を受け入れさせようとするのであれば、必ずカトリック・キリスト教の教義と、孔子や孟子に代表される儒学思想とを合致させ、宣教師達が中国思想である儒学に対して十分な素養があることを示さなければならぬことも認識したのである。このような状況のもと、宣教師達は大変な時間と労力を中国古籍の研究に費やして、古籍籍に示されている「微言大義」を見つけたし、カトリック・キリスト教の教義に牽強付会することによって、中国人士大夫の、宣教師が西洋から持ち来たった宗教や信仰に対する心理的な不安や疑問を減少させようとしたのである。

彼ら宣教師が採用した「迂回【適応】方式」による布教活動は、中国人知識層との広範囲の交友関係を持つことや、上層階級である士大夫らとの良好な社会的関係を築くことを可能にし、宣教師達の中国における立場に対して様々な利便をもたらした結果、上層から下層へという新たな布教方法への道を開いたのである。

宣教師達は西洋の科学や文化を紹介するという方法を通してカトリック・キリスト教を広めようとしたので、中国人知識層に向けて天文学、暦算学、地理学、数学、幾何学、論理学、芸術などを宣伝し、それによって知識人の尊敬を集めたことは、布教活動を推進する上で多大なメリットを彼らにもたらした。

以上、簡単にイエズス会宣教師【以下、イエズス会士】が中国布教に際して用いた方針について紹介したが、正にこのような中国特有の状況に的確に対応した方法によって、カトリック・キリスト教は中国布教に於いて成功を収められたのであり、また同時にこのような布教方法をとったからこそ、客観的に見て彼ら宣教師達を「西学東漸、中学西伝」の媒介者と見なすことができるのである。

二、明朝から清朝期にかけて甬【寧波】地方に渡来したカトリック・キリスト教宣教師の活動業績について

明朝から清朝期におけるカトリック・キリスト教は、費楽徳 (Rodrigue de Figueroa) が、明の崇禎元年 (1628年) に甬【以下寧波地方】で布教活動を行ったことに始まり、清の康熙六十年 (1721年) に中国でキリスト教が全面的に禁止されることで終わる。この約100年の間に十数人の宣教師が寧波地方で活動をおこなったが、それらは全員、イエズス会士であった。これより後の雍正年間から道光年間にかけては、中国【清朝政府】は一貫してカトリック・キリスト教の宣教師活動に対する厳しい制限を課したため、100年を越えるの間でも、寧波地方で外国人宣教師が活動した痕跡を見いだすのは難しい。そこで、ここでは上記の時期に寧波地方に到達し活動したことが確認できるカトリック・キリスト教の宣教師【イエズス会士】を列挙した後、彼らが残した足跡について簡単に述べ、またそれぞれの著述を列挙するが、その場合には自然科学関係の書物や中国古籍籍の訳著を重点的に取り扱うこととした。

費楽徳、字は心銘 (Rodrigue de Figueroa, 1549~1642年)、ポルトガル出身。1622年に中国に渡来し、マカオを経て杭州で布教活動をおこなって

いる時に、一時期寧波にも到った。中国に来る前はローマで神学を専攻していた。

1628年3月、寧波出身のカトリック信者である王芳済の要請に応じて寧波の鄆鎮（原注：恐らくは鄆隘であろう）に到り布教活動をおこなった。彼が寧波におけるカトリック・キリスト教の最初の宣教師であり、寧波地方で八十人に洗礼を授けたが、これ以外にも教えを請う者が数百人いたという。費樂徳神父はその後開封に移って生活すること10年以上に及び、一教堂を建てたが、1642年にその地で逝去した。『聖教源流』4巻などの著述を残した。

利類思、字は再可 (Louis Buglio, 1606～1682年)、イタリア出身。1637年に中国に渡来する前は人文学の教鞭を3年間執っていた。1638年の冬、利類思神父は寧波のカトリック信者である朱宗元の要請に応じて、寧波城内で布教活動を行い、十五人に洗礼を授けたが、その多くは知識人であった。

利類思神父は中国に来てからまず杭州で中国語を学習しながら、布教活動に従事していた。1640年に四川省に派遣されて成都に駐在したが、これが四川省に行つて布教した最初のヨーロッパ人である。この成都では当地の著名な知識人や官吏らと広範な交友関係を結び、キリスト教の信仰に入る者が甚だ多かつた。

1643年に張猷忠が成都を占拠して「大順」政権を打ち立てた時、利類思神父らに銅製の球儀を2台、1台は地球儀で1台は天体儀であるが、別にもう1台日時計を製造するよう依頼した。製造には8ヶ月かかったが、天体儀の表面には星が散りばめられ、黄道がぐるりと一周引かれ、更に中国で使われる二十八宿も組み入れられた。地球儀は中国の「広輿図」に基づいて5つの区分がなされ、それぞれに各国名や有名な都市、山や河が描き入れられ、更に世界各地の珍しい物に関する説明なども書き加えられた。

利類思神父の主な著述は以下の通りである。『西方紀要』1冊は、1669年北京で出版された。この書は西洋のいくつかの主要な国の習俗や国情について紹介した書物である。『西曆年月』は、1679年北京で出版された。この書は中国曆と西洋曆とを対照した曆に関する書物である。『獅子説』1冊は、1678年に北京で出版された。これはポルトガルからの使者が中国皇帝にアフリカライオンを進呈したため、特別に作成された。『進呈鷹説』1冊は、1679年に北京で出版された。この書は満州人が狩猟用の鷹を飼ひ慣らすことを好む趣向に合わせて作成され、動物学の知識やヨーロッパでの狩猟用の鷹を飼ひ慣らすことに関する知識などが紹介されている。

陽瑪諾、字は漢西 (Emmanuel Diaz Junior, 1674～1659年)、ポルトガル出身。マカオで6年間神学の教鞭を執った後、1611年に韶州に派遣されて布教活動をおこなっていたが、1616年に発生した南京教難にもなつてマカオに追放された。1621年に再び北京に派遣されたが、練兵に関する新しい方法を熟知していたことや銃砲の術に通暁していたため、朝廷内のキリスト教を信奉する士大夫によつて朝廷に推薦された。これによつて陽瑪諾神父は自由に布教する許可を得たのである。1623年に陽瑪諾神父は中国布教区の副会長に任命され、その在任期間は18年の長きに及んだ。杭州地区の布教責任者であつた費樂徳神父が1629年に開封に派遣されたことにより、陽瑪諾神父は費樂徳神父の後継として寧波地区の布教責任者となつた。その何年か後の1639年には、再び杭州から寧波に来て布教活動を行い、6日間逗留して教人に洗礼を授けた。

陽瑪諾神父の主な著述は以下の通りである。『聖經直解』は、1636年に北京で出版された14巻本や、1642年、1790年に北京で出版された8巻本があり、19世紀の初めに寧波で出版されたものもある。この書物は古文体の漢文で書かれた、聖書の注解書である。『景教碑註』1巻は、1644年に杭州で出版された。この書物は漢文を用いて西安で発見された『大秦景教流行中国碑』に対する解説書であり、中でも「教義」について正面から取り上げた部分は、西洋人による『大秦景教流行中国碑』関係の著作として大変重要である。『天問略』は1615年に北京で出版され、『四庫全書』にも収録されている。この書物は托密勒【プロトマイオス】の天文学に関する注解書で、問答形式で書かれており、大量の図解も含んでいる。『軽世金書』4巻は、翻訳書であり、1757年、1880年【「1800」の間違いであろう】、1815年に北京で出版され、1848年には上海でも出版された。この書物は中国の信者からは『聖書』に次いで重要視された宗教関係書籍である。

孟儒望、字は士表 (Jean Montero, 1603～1648年)、ポルトガル出身。マカオで哲学を3年間、神学を2年間教えた。その間、修道院長も兼任していた。1637年に江西省に派遣された後、1639年に杭州に到った。1640年に寧波で布教活動を行い、560人に洗礼を授けたが、その中の多くは役人であつた。孟儒望神父は寧波に5年間居住した後、1645年に寧波を離れてマカオへ移った。

孟儒望神父の主な著述は以下の通りである。『天学略義』1冊は、1642年に

寧波で出版され、郵具出身の朱宗元によって文章の推敲を受けた書物である。この書は十一章からなる、「使徒信条」の解説書である。『照迷四鏡』1冊は、1643年に寧波で出版された。別名を『天学四鏡』と言う。『辨敬録』1冊は、真の崇拜、偽の崇拜、真の儀礼、偽の儀礼について論じた書物である。

衛匡国、字は濟泰 (Martin Martin, 1614~1661年)、イタリア出身。ローマ大学を卒業した後、吉開ル (Kirchen) 神父の指導の下、数学を専攻した。衛匡国神父は1643年に中国に渡来し、当初は浙江地方で布教活動を行っていたが、その後杭州に駐在し常々寧波にも来ていた。1648年には、手始めに寧波城内にカトリック・キリスト教の教堂を建設した。衛匡国神父が作製した『中国新興図』には、当時の寧波には大変多くの信者がいた、との書き込みがある。

カトリック・キリスト教の第三回目の中国伝来以後、宣教師達は中国の伝統的な文化である祖先祭祀や孔子崇拜に対する態度によって立場が分かれてしまった。そのため、ついには衛匡国神父がローマに戻り、中国の状況を総括的に報告して、中国における儀礼への対応について指示を仰ぐことになった。衛匡国神父は1650年に出発し、フィリピンを経てからアイルランドやノルウェー、ドイツ、ベルギーなどの国々を回り、途中オランダのアムステルダムでは、神父の著作の中で最も大きな影響を与えた著作である『中国新興図』を印刷に付した。1654年になってローマに到達し、5ヶ月以上の報告と議論を経て、教皇アレクサンデル7世はカトリック・キリスト教の中国における布教活動の最大の障害を除くために、中国人信者が行っている「祭祖尊孔(祖先祭祀と孔子崇拜)」を中国における「儀礼習俗」として認可したのである。1657年に衛匡国神父が再び中国に帰るためヨーロッパを出発した時、彼は厳しい選抜を経た学術に造詣の深い宣教師を一人伴って中国に戻って来た。

衛匡国神父は博識であり、万里の長城などの僻地や国境付近までをも含んだ中国各地の省を巡り歩いている。神父は各地を巡り歩いている間でも、机に向かって研究を進展させる時間を持ち続けた。天文観測を定期的に行っては、中国の多くの都市の地理的位置を測定し、これがその後『中国新興図』のような大著を世に送り出すことに繋がったのである。

衛匡国神父の主な著述は以下の通りである。『中国新興図』は大型の本で、1655年にオランダのアムステルダムで出版された。この書はこれまでに多くの言語に訳出され、17枚の地図と171頁にわたる説明からなっている。附録の中

には、1枚の日本地図も含まれている。この『中国新興図』は当時出版された中国に関する著作としては、最もまとまった、且つ正確な書物であった。『中国上古史』は1658年にミュンヘンで出版された。1692年にはフランス語に訳されてパリで出版された。この『中国上古史』には、中国における、古代から西暦元年までの歴史上の大事業が述べられている。『鞞鞞戦記』は1654年にオランダのアントワープで出版された。この『鞞鞞戦記』には、鞞鞞人(清朝満州族)が、中国に侵入し全中国を占領していく過程が記載されており、併せて漢民族及び満州族の風俗や人情についても紹介されている。また、衛匡国神父には郵具出身の朱宗元の協力を得て、蘇亞来斯 (Favarez) 神父の著作を中国語に訳出した書籍もある。

【以下、畢芳濟に続いて、洪若翰、白晋、李明、張誠、劉応、利聖学、郭中伝などの神父の略歴が紹介された後、彼らの活動や著述が、寧波地方の文化にどのような影響を与えたかについての考察が述べられて、本論は終わっている。その部分の訳文については、続稿に掲載する予定である。】

○(原注)【書誌情報は原注のまま。国名・人名は訳出した。】

参考文献

- ①『郵具通史』
- ②『寧波文史資料存稿選編』
- ③(フランス) 費頼之 [Favier, フィスター] 『明清間在華耶蘇会士列伝』、天主教上海教区光啓社出版。
- ④世界宗教研究所基督教研究室編『天主教基礎知識』、宗教文化出版社。
- ⑤晏可圭『中国天主教簡史』、宗教文化出版社。
- ⑥李寛椒『中国基督教史略』、社会科学文献出版社。

・本論文は、文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」(研究課題番号17083012「寧波における知の営みとその伝統・学脈・宗族・トポフィリア」代表早坂俊廣信州大学人文学部准教授)及び同補助金「若手研究(B)」(研究課題番号19720011「東アジアの宗族におけるキリスト教思想の影響・儒教規範に基づく家族規範を中心に」)による研究成果の一部である。